news　ニュース

能登半島地震 被災寺院の住職に聞く

地震発生から2週間が経過しても、被災地では道路が寸断され、断水や停電などが続き、被災した人々は不安で厳しい生活を余儀なくされている。七尾市・光顕寺（豊原峰学住職）と能登町・法栄寺（弘﨑信正住職）に電話取材を行い、話を聞いた。

17年前の震度6は耐えたのに…

庫裏が全壊した七尾市・光顕寺

震源から約45キロの石川県七尾市・光顕寺は、庫裏が全壊し（1面に写真）、本堂の棟瓦が全て落ちた。豊原住職（72）は「古くからある庫裏は屋根瓦が重かったのか。17年前の震度6には耐えてくれたのに…」と話す。

元日に起きた地震。「午前中は門徒さんとの年頭の挨拶を済ませ、午後からは外出し車で帰っている時に1度目の地震が起きた。家に安全確認の電話をした3分ほど後にお寺の近くまで帰ってきたら、門前の門徒宅が倒壊し、80代の女性が玄関辺りに倒れていた。息子と女性を助け出し、一緒に集会所に逃げた」と豊原住職は地震直後の様子を語る。

七尾湾に浮かぶ能登島にある同寺。境内が埋め立て地であるため、何カ所かに液状化現象が起きているという。大正時代に建築の本堂の棟瓦はすべて落ち、本堂入口の天井や外壁は剥落した。山門は土台から外れて前にずれ、倒壊寸前で止まっている。

震災後、能登島のコミュニティーセンターに避難し、現在は親類宅に身を寄せている。

豊原住職は「門徒の皆さんの様子はハガキを出すなどして確認していきたい。そして、今後についてはご門徒の皆さんと相談していきたい。住職と門徒さんが同じ方向を向くことが大事。今までずっと一緒に歩んできた門徒さんと、思いを分かち合いながら進めていきたい」と語った。

「生きていてよかった」が精いっぱい

津波にも襲われた能登町・法栄寺

震源から約17キロの石川県能登町・法栄寺（弘﨑信正住職）は震度6の地震後、津波に襲われた。

弘﨑住職（75）は普段は弘美坊守と2人暮らしだが、福井で暮らす長男家族が正月で帰省していた。揺れが収まり、全員で外に避難すると、大津波への警戒を知らせる町内放送がしたたましく流れた。

弘﨑住職は「海とは500メートルあまり離れているが、放送の時にはもう波が押し寄せる音がしていた。九里川尻川（2級河川）がすぐそばなので、危ないと思い県道に出ると側溝から水が吹き上がっていた。津波が九里川尻川を駆け上がってきた」と話す。

地震の揺れで、本堂の屋根が裂け、後ろ側ははずれて落下。床は中央が盛り上がり、柱は前のめりに歪んだ。全体が傾き、雪囲いに支えられている状態。

「いつ倒れてもおかしくない」と弘﨑住職。「ご本尊は無事だった。親鸞聖人と蓮如上人の影像とともに別の建物にお移しした」と話す。

鐘楼は倒壊し、本堂に並んで建つ庫裏は床上まで浸水した。境内には約10センチの泥が堆積した（写真）。もう1つの庫裏も、ガラスが割れてすき間風が入り、ガス漏れや漏電が心配なため、生活できない。

弘﨑住職夫妻は1月10日現在、近くの消防署の分署の2階で避難生活を送っている。「当初はご門徒さんはじめ地域の方と合わせて70人くらい避難していた。子どもが住む金沢や富山などに避難した人や、電気が復旧して自宅に戻る人もあり、今は40人くらい」と話す。「断水が続く中、教区の僧侶の方々が水を届けてくださったり、本山から支援物資もいただいた。避難所と地域住民に配らせてもらった」と感謝する。

弘﨑住職は「お寺に戻り、少しずつでも片付けをしたいが、特に本堂が大変危険な状態なので思うようにはいかない。5月の地震被害を報恩講に間に合うよう修復したばかりで無念でならないが、門徒さんすべてと連絡がとれ、皆さんの無事が確認できたので一安心。これからのことは、もう少し落ち着いてから門徒の皆さんと話し合っていきたい」と語った。

弘﨑住職は鳳珠組（9カ寺）の組長を務める。自ら被災した中、組内寺院の状況確認にも回る。交通事情もあり、訪ねられていない寺院もあるが、本山の救援隊を案内して物資を届けながら声を掛けている。「『まあ、生きていてよかったな』と言い合うのが精いっぱい。そして最後は『まあ、がんばらなしゃあないな』と言っている」と話した。

道路の寸断で断水、停電など続く地域も

本山 復旧支援隊のべ37人を派遣

被災寺院を訪ね物資届ける

本山は1月4日から、復旧支援隊を派遣している。14日までに6次にわたり合計37人の宗派・本願寺職員が参加した。

支援隊員は2トントラックやワゴン車などで被災地に向かっている。11日までに石川教区内の被災寺院を訪問し、住職から被災状況を聞き取るとともに、見舞状やタオル、飲料水、食料品などを届けた。また必要な支援物資についての要望を聞いた。

第3次支援隊として1月6日から8日まで被災地で活動した好井正智さん（30）と小山融さん（48）、藤岡智海さん（31）は、ワゴン車に支援物資を積み込み能登半島中ほどにある穴水町の光琳寺（長谷川逑麿住職）、法栄寺（比良祐之住職）、真龍寺（幽経一郎住職）を訪ねた。

自動車専用道路「のと里山海道」で向かったが、かなり手前で通行止めとなり、一般道を走行したが、地震で路面が相当傷んでおり、激しい渋滞が起きている。一般道に降りてから3時間かかってようやく穴水町に到着したという。

穴水町を走る災害支援トラック。右側には倒壊した家や壁が崩落した建物が見える

奥能登への道路は、倒壊した家が道をふさいだり、陥没したり片側通行の場所も

最初に訪れた光琳寺は周辺の集落全体が崩壊しているような惨状。同寺も本堂（写真は3面）、庫裏などに大きな被害が出ているが、同寺が運営する保育所に近隣住民37人が避難していた。その多くは高齢者。公的な避難所ではないため、支援物資が手薄で、支援隊が飲料水や米などの支援物資を届けるとても喜ばれたという。

好井さんは「被災者の方々は、肉体的にも精神的にもかなり疲れておられた。しばらくは物的援助が必要だと思うが、今後は被災者の心のケアも大事になってくる」と話した。

同じく第3次支援隊に参加した西郷誠哉さん（33）、川井周裕さん（48）は、支援物資を積んだ2トントラックで通常は2時間ほどの道のりを5時間半かけて奥能登地方の能登町にある松岡寺（波佐谷真充住職）と法栄寺（弘﨑信正住職）、珠洲市の真浄寺（野崎至住職）を訪ねた。

奥能登に向かう車窓からは全壊、半壊している民家などがいくつも見え、震災の惨状に心が痛んだという。法栄寺の弘﨑住職夫妻は門徒たちとともに集落にある消防署の分署に避難しており、分署を訪ねた。分署の2階では毛布にくるまり疲れた表情を浮かべる被災者を消防団員が励ましていた。

西郷さんは「皆さん疲れていたが、支援物資を届けると喜んでくださって、分署の中に運び入れるのを手伝ってくださった。これからも息の長い支援を続けていくことが大切だと痛感した」と話す。

支援隊はこのほか、支援センターで各寺院の被災報告をまとめたり、災害ボランティア受入体制の構築などを行っている。

中能登町・瑤泉寺の豊秋英雄住職から鐘楼の被害を聞き取る第4次復旧支援隊員

■能登半島地震 宗派の動き（1月1日～14日）

1月1日
○各被災教区に状況報告を依頼

1月2、3日
○各直属寺院（別院、教堂）、教区から被害状況を受信。引き続き被災状況の把握。

1月4日
○第1次復旧支援隊2人（午前）、第2次復旧支援隊2人（午後）を、本山から金沢別院へ派遣。
○第1次復旧支援隊が石川教区鹿島組の被災寺院を見舞い、支援物資を搬送し、現地調査を実施。
※以下、復旧支援隊の見舞いでは支援物資の搬送と現地調査を実施。

1月5日
○第2次復旧支援隊が石川教区鹿島・島崎山組、高岡教区氷見・氷見東・氷見西組を見舞う。
○能登半島地震災害義援金の募集を開始。

1月6日
○第3次復旧支援隊9人を派遣。
○第3次復旧支援隊が石川教区鳳珠・島崎山組を見舞う。

1月7日
○第3次復旧支援隊が石川教区鹿島・羽水・島崎山組を見舞う。
○本山に能登半島地震緊急災害対策本部（中央本部）、石川教区教務所に石川教区現地緊急災害対策本部（現地本部）を設置、両本部員を委嘱。
○新潟・国府・富山・高岡・石川教区に見舞金交付を決定。

1月8日
○第3次復旧支援隊が石川教区羽水組を見舞う。
○第4次復旧支援隊10人を派遣。
○浄土真宗本願寺派能登半島地震支援センターを金沢別院に設置。支援センター長、現地コーディネーターを委嘱。

1月9日
○第4次復旧支援隊が石川教区鹿島・金沢組を見舞う。
○能登半島地震支援センターのX（旧ツイッター）、インスタグラムを開設。

1月10日
○能登半島地震支援センターのホームページを開設。
○第4次復旧支援隊が石川教区金沢・江南組を見舞う。

1月11日
○荻野総務（総局員）が石川・高岡教区を見舞い、現地を視察するため出向（～14日）。
○第5次復旧支援隊7人を派遣。
○第4次復旧支援隊が石川教区金沢組を見舞う。

1月12日
○能登半島地震支援センターへ届けられた支援物資の提供を開始。

1月13日
○第5次復旧支援隊が石川教区鳳珠組へ支援物資を搬送し現地調査。

1月14日
○第6次復旧支援隊7人を派遣。